

〈2〉市民意識を高め・課題に気づく 「地域学講座」の展開

生涯学習課生涯学習グループ 主任 峰島 啓隆

1 はじめに

近年、地域社会の人間関係の希薄化や人々の孤立化が指摘されている中で、東日本大震災を1つの契機として、個々人が積極的に社会に参加し、他者と協働しながら、主体的に「互助・共助」による活力ある地域づくりに貢献していこうという機運が見られる。このような流れの中で、地域課題の解決や地域社会の活性化などの取組を促進するためには、各個人の学習した成果を社会に還元し、社会全体の持続的な教育力の向上に貢献する仕組みづくりが求められている。

本市では、平成25年3月に「第2次宇都宮市地域教育推進計画（地域教育プラン）」を策定し、基本理念である「学びを通じて豊かな人間性を育み、地域ぐるみにより、教育活動やまちづくりを支える社会の実現」に向け各種施策事業を実施しているところである。

本稿は、本市において「市民意識を高め・課題に気づく」ための事業として推進している「地域学講座」の展開に向けた取組について報告する。

2 求められる地域を支える人材育成

本市では地域課題の解決に寄与する講座の開催やワークショップによる「人材育成」を図る学習プログラムを生涯学習事業に取り入れるなど、幅広い学習を提供してきたところである。

一方で、平成24年に実施した「生涯学習・社会教育に関する市民意識調査」¹においても、「学習

成果を地域のまちづくりに活かす機会の充実」が高い回答を得るなど、今後の生涯学習・社会教育の推進にあたり「地域を支える人材の育成」や「地域における学習成果の活用促進」など、これまで以上に「地域」や「まちづくり」に視点を置いた事業展開が求められている。

3 地域を学ぶことの必要性

「学び」の機会を通して地域住民の協働によるまちづくりを促進させるためには、以下の事業プログラムを構築する必要性が高まった。

- 地域の現状を踏まえた地域課題の把握
- 地域課題に対応した講座等の実施
- 地域の課題や魅力に気づくための学習
- 人を繋ぐマッチングシステム など

これらの事業推進に伴う課題の解決に向け、平成24年度は、社会教育を所管する「生涯学習課」、まちづくりを所管する「みんなでまちづくり課」、各地区の「生涯学習センター」、「図書館」の担当職員で構成するワーキンググループ（以下「ワーキング」という）を設置し、課題の抽出・整理や今後の事業のあり方について検討を進めた。

ワーキングの議論の中で、各地域で抱える課題は地域ごとに異なり、また、解決の方法や優先度も地域により差があることから、まず、「地域住民自らが課題に気づき、地域で共有する仕組みの構築」とあわせ、「モデル事業を通じた地域課題解決学習プログラムづくり」に関する検討が行われた。

ワーキングの報告書では、今後、地域住民が学習成果を社会参画や社会貢献の活動につなげていくために必要とされる「実践的な学習機会提供のプロセス」として以下の施策が明示された。

¹「宇都宮市地域教育推進計画」改定の基礎資料とするため、市民を対象に宇都宮市教育委員会が実施。

●庁内研究活動報告

- (1) 「市民意識を高め・課題に気づく」ための事業
⇒ 「地域学講座」 (図1)
- (2) 「仲間づくり・仲間入り」のための事業
⇒ 「人材バンク事業 (お福分け事業)」 (図2)
- (3) 「必要な知識・技術を身に付ける」ための事業
⇒ 「課題解決プログラム」

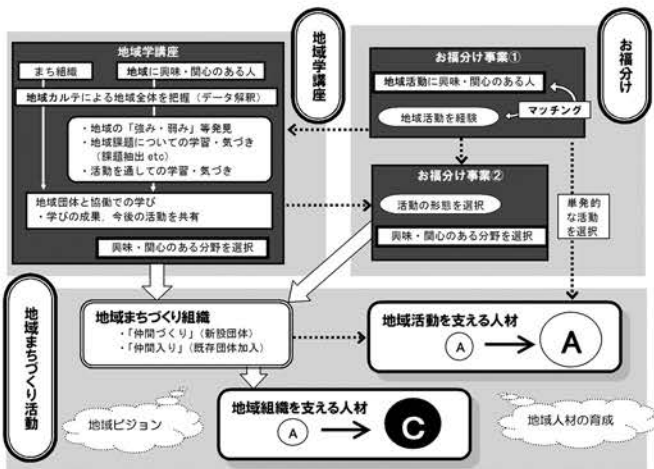


図1 「地域学講座」と「お福分け事業」との関係
地域課題解決のためのワーキング事業報告書から抜粋

特に「地域学講座」については、「地域の現状を知る」、「地域の課題に気づく」ための学習からのアプローチとして実施するものであり、各地域における円滑な導入・実施につなげることが重要であることから、事業のさらなる具体化に向けて検討を重ね、図3の内容を本市における「地域学講座」として定義した。

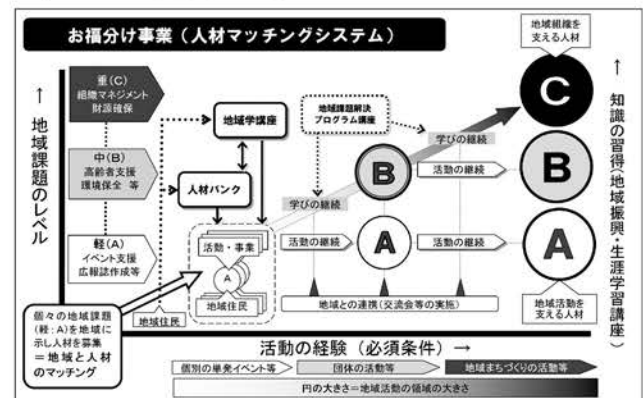


図2 「お福分け事業」について
地域課題解決のためのワーキング事業報告書から抜粋

○地域学講座の定義

- ① **学びを通じた「仲間づくり」**
今後の地或活動を共に担う「人材・人材」同士の「仲間づくり」を促すために、参加者同士や地或住民との「親睦の深まり」を意識した学習内容を取り入れていること
 - ・ アイスブレイク等による「参加者」同士の交流
 - ・ フィールドワーク等による「地或住民」との交流
 - ・ ワークショップ、茶話会等による「地或活動者」との交流⇒ まちづくり協議会など、地或団体との連携（講師、スタッフなどの協力）を含む
- ② **「地域カルテ」による学び**
地或の現状を学ぶために、「地域カルテ（類型化した地或のデータ）」を活用し、カルテの内容の全てを学習内容に取り入れていること
- ③ **「フィールドワーク」など体験型学習による学び**
地或の「魅力」や「課題」に気づくために、「フィールドワーク」などの手法を活用し、地或を実際に「見る」「聴く」「触れる」などの五感で学ぶ講座内容を取り入れていること
- ④ **地或団体と協働による「学び」・「活動」**
地或課題の解決に確実に繋げていくために、「地或団体の活動者」を交えた「学び」や「ふりかえり」を行う学習内容を取り入れていること
 - ・ 学んだことを十分に「ふりかえり」、未来へ繋ぐ
 - ⇒ 学びの成果を共有する（知ったこと、気づいたこと。）
 - ⇒ 今後の活動を共有する（知るべきこと、やるべきこと。）
 - ・ まちづくり協議会などの地或活動参画へのマッチングなど
- ⑤ **学びの成果を「形に残す」**
学んだ成果を「地或の財産」として共有し、次の学びに継承するために、「形に残る成果物」を作成する学習内容を取り入れていること
 - ・ 地域カルテの一部として、成果物を編さんする
 - ・ 地或内施設や広報媒体への掲示・掲載など、地或への周知機会の創出
- ⑥ **参加者が楽しく学ぶ工夫**
「地或」をキーワードとした「楽しく学ぶ」演出を学習内容に取り入れていること
 - ・ 受講満足度の高まりによる「地域学講座」の発展・拡大
 - ・ 「地或」について、学ぶ意欲の高揚・継続

図3 地域学講座の定義

地域課題解決のためのワーキング事業報告書から抜粋

4 地域学講座の展開に向けて

(1) 「地域学講座」等に関する担当者会議

本市では、生涯学習センターにおいて地域の特性や地域課題などを踏まえ、学ぶことの喜びや仲間づくりにつながる趣味・教養的な講座や生活に役立つ講座、個人の自立につながる講座など、幅広い学習の機会を提供しているところである。

25年度は「地域学講座」を各地域において円滑に導入することを目的として、生涯学習センターとみんなでまちづくり課との連携による担当者会議を立ち上げるとともに研修会を実施した。

研修会では、地域学の必要性や社会教育が担う領域などを再確認し共有を図るとともに、宇都宮大学地域連携教育研究センターの廣瀬隆人教授や民俗研究家の結城登美雄氏など学識経験者を招へいし、先駆的地域の取組事例などを学んだ。

このような研修を通じて、各担当者が「地域学講座」の目的や意義、必要性などについて理解を深めたものの、地域資源を調査研究する「フィールドワーク」の知識や手法等の習得など、実際に「地域学講座」を企画・運営する上での新たな課題も見えてきた。

(2) フィールドワークの体験による事例研究

1) 雀宮地区を事例に

こうしたことから、第4回目の担当者研修では、「ナニコレ雀宮再発見！」と題し、雀宮地区を事例地として、地域の魅力探しをテーマに、講義とあわせてフィールドワークを実践した。

2) まちを五感で捉える

講義は有限会社マスタープランの高岡耕子氏より、「五感を発動！雀宮の『まちなか』の歩き方」と題し、地域の探索方法や自らの五感を発動した「まち」の捉え方についての講義を実施した。まちの魅力をつかむには、まず、五感を研ぎ澄ます

ことが重要であり、視覚や知識に頼った従来の感覚を取り除き、まちを感じとることが重要であることを学んだ。

特に「まちの魅力」は「五感を総動員し自分の魂で面白いと感じて発見できるということ、まちを愛し誇りと思うこと、そう思えるまちに育てることが大切である」との講師からの言葉は「地域学講座」の本質であり、今後各地区において地域学を展開する上で大変参考になるものであった。

3) 歩く速さで「まち」を捉える

講義後のフィールドワークでは、JR雀宮駅を起点に、4名程度のグループに分かれ、各自が他の人に伝えたいと感じる「新たな魅力」を探して、地元の方々とはふれあいながら「まち歩き」を行った。普段は車から見ている雀宮地区の風景も、歩く速さで見てまわると、建物や石碑など新たな「気づき」があり、フィールドワーク終了後には、各自が五感で感じて発見した「新たな魅力」について発表を行った。

五感で捉えたまちの魅力は、いずれも興味深いものがあり、本稿では紙面の関係で詳細を紹介することができないため、興味のある方は、ぜひお問合せをいただきたい。

4) 地域を比較・分析する

研修の最後には、市政研究センター井上係長による「いつものまちが違って見える！？」と題した、雀宮地区の変遷や他地区との比較などの講義を実施した。

講義では、航空写真を用いた雀宮地区の変遷の俯瞰的な捉え方、人口の推移など統計データを用い他地区との比較や地図と重ね合わせた土地利用状況の変化など、多角的な観点から地区を把握する方法を学ぶとともに、現在の暮らしの中に生きる歴史資源の見方や価値についても説明があり、活用できる資源は多様なものがあることを学んだ。特に地域づくりには、地域で暮らす人々の知恵・行動・思いの度合いが大切であり、地域づくりの

●庁内研究活動報告

義は、市民と協働によるまちづくりを進める上で
の行政の役割を改めて認識するものであった。

5) フィールドワークを通して得たもの

この研修では、フィールドワークとあわせて、
地域の歴史的背景や特徴などの考察手法について
も習得し、参加した職員からは、「新たな発見があ
った」、「雀宮への愛着が深まった」などの感想が
よせられ、今後の地域学講座の実施に活かせる大
きな収穫があったものと考えている。

また、研修会を企画する中で、講師の高岡耕子
氏や担当の社会教育主事が、公私を問わず幾度と
なく雀宮を訪れ、地域の方と同等、もしくはそれ
以上に雀宮を学んだ姿を目のあたりにし、各地域
において、地域学講座を実施・展開するうえでの、
企画者側の情熱や熱意の重要性・必要性について
も強く実感したところでもある。



写真 発見したナニコレ雀宮の一部

構築を図ることが必要であるとしている。

地域社会の人間関係や連帯感が希薄化する昨今
において、持続可能なコミュニティの再生は喫緊
の課題であり、そのために我々は、既存の事業や
枠組みにとどまらず、新たな可能性にチャレンジ
することが求められている。

今回報告した「地域学講座」は、今後の地域活
動を共に担う「人材・人財」同士の「仲間づくり」
に寄与するため、平成24年度の「地域課題解決
のためのワーキング」による検討や平成25年度の
「地域学講座に関する担当者会議」など、試行錯
誤を重ね、その取組の成果は各地域において独自
性のある地域学講座や郷土愛の醸成を図る講座の
開催などへと展開されているところである。

今後は、各地域における実践を踏まえ「地域の
特性」や「有効性」、また、「効果・効率性」など
も追求しながら、継続的に実施することで、より
実践的で充実した施策事業にしていきたいと考
えている。

今後も引き続き、関係部局が枠を超えた連携協
力体制により、活発な議論・検討などを継続して
積み重ねていくとともに、我々の果たすべき役割
を認識し、本市の持続的な発展のための「人づ
くり・まちづくり」に取り組んでいきたい。

5 今後の展望

国が平成25年6月に策定した「第2期教育基本
計画」では、「絆づくりと活力あるコミュニティの
形成」において、「社会が人を育み、人が社会をつ
くる」好循環システムの構築にあたって、学校や
公民館を地域コミュニティの拠点として位置づけ
ており、地域住民などの多様な人々が集い、学習
することなどを通じ多様な主体によるネットワー
クを構築し、絆をつくり上げ、社会教育行政の再